

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第三十三回）

「高^{たか}

屋^や」

ぬばたまの

よぎり

夜霧は立ちぬ

ころもで
衣手の

たかや

うへ

たなび

高屋の上に

棚引くまでに

作者

とねりのみこ
舍人皇子

（巻九―一七〇六）

（解説）夜霧が立ちこめている。高屋の上に横に長くかかるほど

に立っていることだ。

○「ぬばたまの」は「夜・夕・暗き」等の枕詞。

○「衣手」は高屋にかかる枕詞

○「棚引く」は霧が薄く横に長く引く。

○題詞は「舍人の御歌一首」となっている。舍人皇子は天武天皇の第三皇子。

○「高屋」についてはいろいろな説があるが一般的には飛鳥から眺められ、藤原京から望める飛鳥の東方で奈良県桜井市の「高家^{たいえ}」のこととされている。

○高家は奈良県の中北部、桜井市の南部にある山「御破裂山^{ごはれつやま}」（標

高六一九メートル）の南斜面一帯の地である「多武峰^{たうのみね}」と飛鳥

のちょうど中間ぐらいに位置する標高およそ三〇〇メートルに

ある山村で高地の山腹に傾斜をうまくつかって数十軒の家が、かたまって建っている。

○歌にうたわれている「高屋(現・高家)」からは、山の左手前には甘檜丘が、さらに眼下には藤原京の一角が望むことができる。

(参考文献) 犬養孝著「万葉の旅」・佐々木信綱著「万葉辞典」・一般社団

法人桜井市観光協会編・明日香村村史等

(写生地) 高家集落の北側道路から白壁が多く見られる「高家集落(桜井市)」とその前方には棚田などが続く風景を描く。(杏花)

